





細菌
ウイルス

脳内発熱物質（プロスタグランジン）の産生

発熱

病 気
外 傷

組織侵襲・刺激

のどの粘膜



プロスタグランジン

痛み

生理痛

原因なしの痛み



解熱鎮痛薬とは・・・

そうした痛みや発熱の原因となっている病気や外傷自体を治すものでなく、発熱や痛みを鎮めるため使用される医薬品（内服薬）の総称である。

解熱鎮痛薬では、効果ないこと・・・

腹痛を含む痙攣性の内臓痛については発生の仕組みが異なるため、一部の漢方処方製剤を除き、解熱鎮痛薬の効果は期待できない。

悪寒・発熱時の解熱のほか、頭痛、歯痛、抜糸後の疼痛、咽喉痛（喉のどの痛み）、耳痛、関節痛、神経痛、腰痛、筋肉痛、肩こり痛、打撲痛、骨折痛、捻挫痛、月経痛（生理痛）、外傷痛の鎮痛に用いられる。



解熱鎮痛薬の副作用

■ プロスタグランジンの産生を抑える事による副作用

1. 中枢でのプロスタグランジンの産生を抑えるほか、腎臓での水分の再吸収を促して循環血流量を増し、発汗を促す作用もあるとされる。
2. 末梢でのプロスタグランジンの産生抑制は、腎臓の血流量を低下させることにつながるため、腎機能に障害があると、その症状を悪化させるおそれがある。
3. 肝機能に障害があると、その症状を悪化させるおそれがある。さらに成分によっては、まれに重篤な副作用として肝機能障害、腎障害を生じることがあるものもある。
4. 胃酸の分泌が増し、また、胃壁の血流量が低下することにつながる。なるべく空腹時を避けて服用することとなっている場合が多いが、胃・十二指腸潰瘍があると、その症状を悪化させるおそれがある。

■ その他による副作用

1. 心臓の負担が増すことにつながるため、心臓に障害がある場合には、その症状を悪化させるおそれがある。
2. 解熱鎮痛成分が代謝されて生じる物質がアレルギーとなってアレルギー性の肝障害を誘発することがある。

サリチル酸系	アスピリン(別名アセチルサリチル酸)、サザピリン、エテンザミド、サリチルアミド等
プロピオン酸系	イブプロフェン
アニリン系	アセトアミノフェン
ピラゾロン系	イソプロピルアンチピリン
フェニル酢酸系	インドメタシン(皮膚に用いる薬)

心臓病、腎臓病、肝臓病又は胃・十二指腸潰瘍の診断を受けた人

使用する前にその適否につき、治療を行っている医師又は処方薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされることが望ましい。

これらの基礎疾患がない場合

長期間に渡って解熱鎮痛薬を使用し続けると、自覚症状がないまま徐々に臓器の障害が進行するおそれがあり、長期連用は避ける必要がある。

解熱鎮痛成分に共通

まれに重篤な副作用としてショック(アナフィラキシー)、皮膚粘膜眼症候群や中毒性皮膚壊死症、喘息を生じることがある。喘息については「アスピリン喘息」としてよく知られているが、アスピリン特有の副作用ではなく、他の解熱鎮痛成分でも生じる可能性がある。

胎児への影響を考慮して、妊婦又は妊娠している可能性のある女性

使用上の注意「相談すること」の項で注意喚起がなされている。

アセトアミノフェン	視床下部の体温中枢に直接作用して、皮膚血管を拡張し、熱放散を増大して体温を下降させる。また、中枢性の鎮痛作用がある。	過量投与で肝臓、腎臓、心筋の細胞が壊死との報告。アナフィラキシー様症状、血液疾患。Stevens-Johnson症候群、ライエル症候群。長期投与はさけること。	大衆薬の小児の風邪薬は、ほとんどの場合解熱鎮痛薬としてこれを使用。日頃から酒類（アルコール）をよく摂取する人は、肝機能障害を起こしやすい。
アスピリン	細胞内でのプロスタグランジンの合成を阻害し、その固有の作用（発熱）を抑え、薬効を発揮すると考えられている。医療用では、血小板凝集阻害作用を治療に利用している。	ショック、アナフィラキシー様症状、Stevens-Johnson症候群、ライエル症候群、喘息発作の誘発、消化管出血他。	小児（15歳未満）に対してはいかなる場合も使用しないこととなっている。胎児や出産への影響を考慮して出産予定日12週間以内を避ける必要がある。
イブプロフェン	プロスタグランジンの産生を抑制し、その作用を抑えて効果を発揮する。頭痛、咽頭痛、月経痛（生理痛）、腰痛等に使用されることが多い。	ショック症状、血液疾患、Stevens-Johnson症候群、ライエル症候群、腎不全、消化器疾患、肝機能低下、喘息発作誘発他。	まれに重篤な副作用として、肝機能障害、腎障害、無菌性髄膜炎を生じることがある。全身性エリトマトーデス、混合性結合組織病の診断を受けた人では、無菌性髄膜炎を生じやすい
インチピリン	プロスタグランジンの産生を抑制し、その作用を抑えて効果を発揮する。	ショック症状、発疹、浮腫、Stevens-Johnson症候群、ライエル症候群、血液疾患。	ピリン系解熱鎮痛成分によって薬疹（ピリン疹と呼ばれる。）等のアレルギー症状を起こしたことがある人では、使用を避ける必要がある。

注意（1）ここで示した常用量は大衆薬領域で普通に用いられる量で、医療用に用いられる薬用量というわけではありません。

注意（2）Stevens-Johnson症候群とは皮膚粘膜眼症候群ともよばれ、皮膚の典型的な滲出性紅斑のみならず、口腔粘膜、外陰、眼粘膜を同時におかすことを言う。

注意（3）ライエル症候群（又はライ症候群）は、中毒性表皮剥離症といわれ、はじめ、顔、体幹、四肢に突然痛みを伴ってびまん性の潮紅または紅斑を生ずる。皮膚のみならず、内臓器官を同時に犯すこともある

ジリュウ（地竜）

ツリミミズ科のカツシヨクツリミミズ又はその近縁種を用いた動物性生薬で、古くから「熱さまし」として用いられてきた。ジリュウのエキスを製剤化した製品は、「感冒時の解熱」が効能・効果となっている。



シャクヤク（芍薬）

ボタン科のシャクヤク又はその近縁植物の根を用いた生薬で、**鎮痛鎮痙作用**、**鎮静作用**を示し、内臓の痛みにも用いられる。



ボウイ（防已）

ツツラフジ科のオオツツラフジのつる性の茎及び根茎を用いた生薬で、日本薬局方収載のボウイは、煎薬として**筋肉痛**、**神経痛**、**関節痛**に用いられる。

